



Soka University Education Society

創価大学教育学会 第 19 回教育研究大会

2021 (令和 3) 年 1 月 31 日(日)

研究発表要旨集録



創価大学教育学会



創価大学教育学会 第19回 教育研究大会

2021（令和3）年1月31日（日）午前10時00分～午後2時30分

今年度の教育研究大会は、下記の通り、オンライン（Zoom）にて開催致します。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

○口頭発表 10：00～12：00（第1分科会は10：30開始）

時間	第1分科会 テーマ・発表者（筆頭者）
10：30	現職保育者の3歳児に対する言葉かけの内容の適切さに関する保育経験年数15年以上保育者の評価（1） ○戸田大樹／創価大学教育学部児童教育学科
11：00	保育者志望学生の3歳児に対する言葉かけの内容の適切さに関する保育経験年数15年以上保育者の評価（2） ○田中広美／創価大学教育学部児童教育学科戸田大樹研究室
11：30	幼児のいざこざ場面に関する一考察—5歳児の参与観察を基にした質的研究の結果から— ○岸正寿／生田ひまわり幼稚園
https://us02web.zoom.us/j/86196254098?pwd=dmtnVF4MGxCU2FWZjhLbkxWaXRWQT09 ID: 861 9625 4098 パスコード: 221736	
時間	第2分科会 テーマ・発表者（筆頭者）
10：00	共感性における視点取得の育成—外国語の授業における教材開発を通して— ○野田清美／創価大学教職大学院
10：30	高校生の社会貢献プロジェクトを支援する大学生サポーターの育成—SAGE JAPAN運営大学生による学習会に着目して— ○高久孝一／創価大学教育学部教育学科宮崎猛研究室
11：00	特別活動「話し合い活動」の他教科学習への活用における成果と課題—特別活動研究校の教員意識調査をもとに— ○小畑伸一／八王子市立式分方小学校
11：30	学習成果に及ぼす先行オーガナイザーの効果に関する研究 ○新谷しづ恵／創価大学通信教育部
https://us02web.zoom.us/j/84286702938?pwd=TjFCWTJ1cnFRZzRwR2ZkVBDa3FQdz09 ID: 842 8670 2938 パスコード: 726879	

○自主シンポジウム 13：00～14：30

テーマ	企画者・司会者・話題提供者・指定討論者
小・中学校等におけるインクルーシブ教育の現状と課題～学ぶ喜びを引き出すための交流及び共同学習の進め方～	企画者：山内俊久（創価大学教育学部児童教育学科） 司会者：山内俊久（創価大学教育学部児童教育学科） 話題提供者1：山内俊久（創価大学教育学部児童教育学科） 話題提供者2：高橋雅一（埼玉県立草加かがやき特別支援学校） 指定討論者：加藤康紀（元創価大学教育学部児童教育学科）
https://us02web.zoom.us/j/81428892762?pwd=eW85REZmRnhFMStUcWJtcDhhYmo0QT09 ID: 814 2889 2762 パスコード: 062984	

○ラウンドテーブル 13：00～14：30

テーマ	企画者・司会者・話題提供者・指定討論者
ポストコロナ時代の教育の在り方について語り合う	企画者：創価大学教育学会運営委員会 司会者：長島明純（創価大学教職大学院） 話題提供者：佐生秀之（八王子市教育委員会）
https://us02web.zoom.us/j/86029939951?pwd=eFZkcTVPdXpuSjA2bjhyY1dyYnF2UT09 ID: 860 2993 9951 パスコード: 319935	

目 次

参加者・発表者へのご案内	1
口頭発表 1	3
・ 現職保育者の3歳児に対する言葉かけの内容の適切さに関する保育経験年数15年以上保育者の評価(1) 戸田大樹/創価大学教育学部児童教育学科	
・ 保育者志望学生の3歳児に対する言葉かけの内容の適切さに関する保育経験年数15年以上保育者の評価(2) 田中広美/創価大学教育学部児童教育学科戸田大樹研究室	
・ 幼児のいざこざ場面に関する一考察-5歳児の参与観察を基にした質的研究の結果から- 岸正寿/生田ひまわり幼稚園	
口頭発表 2	7
・ 共感性における視点取得の育成-外国語の授業における教材開発を通して- 野田清美/創価大学教職大学院	
・ 高校生の社会貢献プロジェクトを支援する大学生サポーターの育成-SAGE JAPAN 運営大学生による学習会に着目して- 高久孝一/創価大学教育学部教育学科宮崎猛研究室	
・ 特別活動「話し合い活動」の他教科学習への活用における成果と課題-特別活動研究校の教員意識調査をもとに- 小畑伸一/八王子市立式分方小学校	
・ 学習成果に及ぼす先行オーガナイザーの効果に関する研究 新谷しづ恵/創価大学通信教育部	
自主シンポジウム	13
・ 小・中学校等におけるインクルーシブ教育の現状と課題~学ぶ喜びを引き出すための交流及び共同学習の進め方~ 山内俊久/創価大学教育学部	
ラウンドテーブル	15
・ ポストコロナ時代の教育の在り方について語り合う 創価大学教育学会運営委員会	

参加者・発表者へのご案内

1 参加受付・手続き

オンライン形式のため、特段の手続きはありません。教育学会 HP の研究大会告知情報にある Zoom の URL から、各会場へご参加ください。

2 研究発表要旨収録

今回は、このホームページ掲載のみとなります。（冊子体での作成は未定です）各自、適宜ダウンロードしてご利用ください。なお、大会後は、会員専用ページにての公開となりますので、ご承知おきください。

3 研究発表関係者へのご案内

[口頭発表]

(1) 発表場所・時間

別表のとおりです。開始 30 分前には、アクセス可能になりますので、発表資料の共有提示方法など、ご確認ください。

(2) 発表時間

発表 20 分 質疑応答時間 5 分

進行係が、発表開始後 17 分に時間経過をお知らせします。発表は、所定時間にて終了しますので、ご承知おきください。

(3) 補足資料について

研究発表の資料は発表論文集をあてるのが原則ですが、補助資料の配布が必要な場合には、Zoom のチャット機能を利用して、参加者にご提供ください。

[自主シンポジウム]

(1) 発表場所・時間

別紙のとおりです。シンポジウムの発表時間は、1 時間 30 分～2 時間です。発表の時間配分は司会者にお任せしますが、所定の時間になりましたら、終了していただくようお願いいたします。

(2) 補足資料について

研究発表の資料は発表論文集をあてるのが原則ですが、補助資料の配布が必要な場合には、Zoom のチャット機能を利用して、参加者にご提供ください。終了時に、参加者への忘れ物等の注意喚起をお願いします。

○口頭発表ルーム 1 10 : 30~12 : 00

時間	第 1 分科会 テーマ・発表者（筆頭者）
10 : 30	<p>現職保育者の3歳児に対する言葉かけの内容の適切さに関する保育経験年数15年以上保育者の評価（1）</p> <p>○戸田大樹／創価大学教育学部児童教育学科</p>
11 : 00	<p>保育者志望学生の3歳児に対する言葉かけの内容の適切さに関する保育経験年数15年以上保育者の評価（2）</p> <p>○田中広美／創価大学教育学部児童教育学科戸田大樹研究室</p>
11 : 30	<p>幼児のいざこざ場面に関する一考察－5 歳児の参与観察を基にした質的研究の結果から－</p> <p>○岸正寿／生田ひまわり幼稚園</p>

現職保育者の3歳児に対する言葉かけの内容の適切さ に関する保育経験年数15年以上保育者の評価(1)

○戸田大樹
(創価大学教育学部)

氏家博子
(草苑保育専門学校)

1. はじめに

現職保育者の幼児に対する「言葉かけ」の課題は難解なテーマであるため、この適切さに関する問いの議論は行われておらず、現状では保育者間の「暗黙」の了解に委ねられている。しかし、現職保育者は幼児の発達に応じて、適切な「言葉かけ」を行っていかねばならないが、ベテラン保育者も保育に慣れてしまうことで、自分では気づかないうちに不適切な「言葉かけ」を行っていることが指摘されている(片山・野村, 2007)。

この点に関して、現職保育者の幼児に対する「言葉かけ」の成否のみならず、上山・杉村(2015)は、日本では現職保育者の専門性が語られる文脈によって多様な側面を含むため、現職保育者に関する専門性の発達段階ごとの議論を困難にしていると述べている。そのため、実証的に保育実践を捉えることによって、第三者の介入による効果の検討が可能になる。

これらのことから、本研究では、現職保育者の幼児に対する「言葉かけ」の内容の適切さについて、元熟達保育者2名による評価の関連性から明らかにすることを目的とする。

2. 方法

(1) 調査時期：2018年10月～11月

(2) 調査対象：現職保育者121名

3. 結果と考察

現職保育者が立案した指導案のねらいは「自分たちで作ったおもちゃでみんなと遊ぶことを楽しむ」であり、主活動は「ストローロケット作り」であった。評価者A・Bによる3歳児の配慮が必要な姿「おもちゃを作ろうとしない。」に対する「言葉かけ」の内容の適切さに関する評価の比較及び関連性は、次の通りである。

「5年以上保育者」の3歳児に対する「言葉かけ」の内容の適切さに関する平均値で有意差が認められた($t(52) = 5.92, p < .001$)。よって、評価者Bに比べ評価者Aの方が3歳児に対する「言葉かけ」の内容の適切さの評価点数が高いことが明らかになった。この点から、評価者Bに比べ評価者Aの方が3歳児に対する「言葉かけ」の内容の適切さを高く評価していることが認められた。

また、「5年以上保育者」を対象とする評価者Aと評価者Bの「言葉かけ」の内容の適切さに関する評価点数の相関係数には、有意な正の相関が認められた($r = .31, p < .05$)。したがって、評価者Aと評価者Bの「言葉かけ」の内容の適切さに関連性が認められた。また、評価者2名の実際的评价点数が平均値4以上を示していた。

これらのことから、「5年以上保育者」の3歳児に対する「言葉かけ」の内容の適切さに関して、評価者Aと評価者Bの「言葉かけ」の内容の適切さの評価には関連性があり、内容の適切さに関する評価も高いことが明らかになった。

「5年以上保育者」は、中堅保育者以上に該当するため、「言葉かけ」に重要な留意点である3歳児の「理解しやすい言葉を選びながら、伝えたいポイントをおさえて話す。理解しやすい言い回しを工夫し、何度か繰り返すこともある。」(片山・野村, 2009, p.50)を理解していると考えられる。

また、「5年以上保育者」は自分自身の3歳児への「言葉かけ」において、主体的な省察(平松, 2011)を働かせながら、様々な幼児の状態に気づき、分析的に振り返ること(上山・杉村, 2015)や幼児の意図を実現するための援助に気付く(高濱, 2001)ことにより、「言葉かけ」の実践知の向上を図っていると考えられる。

口頭発表2

保育者志望学生の3歳児に対する言葉かけの内容の適切さに関する 保育経験年数15年以上保育者の評価 (2)

○田中広美 前田奈美 森本紀華 森本沙也桂 嶽野直美 安永浩司
須内秀美 國松梨桂 松本良美 河野さつき 戸田大樹
(創価大学教育学部 学生) (創価大学教育学部 学生・教員)

1. はじめに

現職保育者や保育者志望学生の乳幼児に対する「言葉かけ」は、乳幼児の心身の発達に多大な影響を及ぼす。具体的には、現職保育者の適切な「言葉かけ」は乳幼児の健全な発達を促し、不適切な「言葉かけ」はそれを阻害する。しかし、何をもって「適切な言葉かけ」とし、何をもって「不適切な言葉かけ」とするのか、この「言葉かけ」の適切さに関する問いの議論は行われてない。

また、現職保育者の「実践知」の質を何らかの基準で測定することに対してネガティブなイメージを持つ者も少なくないが、その重要性について、秋田・淀川 (2018) は今をより一層大事な意味あるものにするために、何がありえるのかという新たな可能性に気づく一歩として大事になると指摘している。

そこで、本研究では、保育者の卵である保育者志望学生を対象とし、幼児に対する「言葉かけ」の内容の適切さについて、元熟達保育者2名による評価の関連性から明らかにすることを目的とする。

なお、ここでの評価者2名は元熟達保育であり、保育経験年数36年の評価者A、保育経験年数15年の評価者Bとした。

2. 方法

(1) 調査時期

2018年10月～11月

(2) 調査対象

実習経験学生105名(男性24名, 女性81名)

3. 結果と考察

現職保育者が立案した指導案のねらいは「自分

たちで作ったおもちゃでみんなと遊ぶことを楽しむ」であり、主活動は「ストローロケット作り」であった。

調査の結果、評価者A・Bによる3歳児の配慮が必要な姿「おもちゃを作ろうとしない。」に対する「言葉かけ」の内容の適切さに関する評価の関連性について、「実習経験済学生」を対象とする評価者Aと評価者Bの「言葉かけ」の内容の適切さに関する評価点数の相関係数には、有意な正の相関が認められた ($r=.43 p<.001$)。

したがって、評価者Aと評価者Bの「言葉かけ」の内容の適切さに関連性が認められた。また、評価者Aと評価者Bの実際的评价点数が平均値4以上を示していた。

これらのことから、「実習経験済学生」の3歳児に対する「言葉かけ」の内容の適切さに関して、評価者Aと評価者Bの「言葉かけ」の内容の適切さの評価には関連性があり、内容の適切さに関する評価も高いことが明らかになった。

前述したように、評価者Aと評価者Bの実際的评价点数が平均値4以上を示していたことから、評価者2名は「実習経験済学生」の3歳児の「配慮が必要な姿」に対する「言葉かけ」の内容を高く評価している傾向にあると考えられる。よって、「実習経験済学生」はわずか1カ月程度の保育経験しか積んでいないが、既に実習経験を経た学生であれば、ここで示した3歳児の姿に対してある程度の「言葉かけ」が可能であると考えられる。

キーワード：学生、3歳児、言葉かけ、評価

口頭発表3

幼児のいざこざ場面に関する一考察 —5歳児の参与観察を基にした質的研究の結果から—

岸正寿

(生田ひまわり幼稚園)

1. 問題と目的

子どもたちが園において集団生活をしていく中で、子ども同士のいざこざりは避けては通れないものである。そのいざこざは、年齢や発達段階によって内容が変容する。

子どもの人間関係の育ちを考える際に、いざこざは一つの主要テーマである。集団保育場面において、思いが異なる子ども同士のいざこざは日常的に生じるが、その経験を通して、子どもはお互いに思いを主張し、折り合いをつける体験をし、きまりの必要性や自分の気持ちを調整する力が育まれると考えられている。

本研究の目的は、認定こども園に通園する5歳児のいざこざ場面について参与観察を行い、考察することで5歳児のいざこざ場面での保育者の援助のあり方について、その知見を得ることを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象者

各施設の園長に研究説明・依頼を行い、協力の承諾を得られた川崎市内にあるAこども園5歳児クラス（男児17名、女児16名）計33名である。

(2) 調査期間

2018年7月30日～10月31日までの3か月間の合計5日間を利用し、自然観察を行った。

(3) 調査方法

いざこざの観察においては、参与観察法を採用し、いざこざが発生した時に記録をした。その際、幼児の個人が特定されないよう記号化された氏名、いざこざが起きたと推察される要因、周囲の状況、発話などを記録した。

1) 事例数：10事例

2) 分析方法：10事例をカテゴリ分けし、いざこざの原因・方略・終結について、田中ら（1999）の原因・終結・方略のカテゴリ表を参考にし、発生したいざこざの分類を行った。

3. 結果と考察

5歳児のいざこざの発生原因・方略・終結一覧については、表1に示す通りである。いざこざの原因は、不快な働

きかけが4件、遊びに関する決定のずれ3件、物・場所の所有が3件であった。

表1 5歳児のいざこざの発生原因・方略・終結一覧

事例	年齢	性別	人数	原因	方略	終結
事例1	3・5歳児	男	2人	物の所有	不快な発声	第三者の介入
事例2	5歳児	男	2人	不快な働きかけ	実力行使	第三者の介入
事例3	5歳児	男(2)女	3人	不快な働きかけ	命令	第三者の介入
事例4	5歳児	男・女	2人	場所の所有	依頼	第三者の介入
事例5	5歳児	男	2人	不快な働きかけ	実力行使	第三者の介入
事例6	5歳児	男(2)女	3人	不快な働きかけ	実力行使	第三者の介入
事例7	5歳児	女	4人	遊びに関する決定のずれ	命令	一方の圧力
事例8	5歳児	男・女	2人	物の所有	主張	ものわかれ
事例9	5歳児	男	4人	遊びに関する決定のずれ	拒絶	自然消滅
事例10	5歳児	男・女	2人	遊びに関する決定のずれ	拒絶	自然消滅

先行所有のルールが幼児の中に存在しており、自分が座っていた場所に他の幼児が座る、先に使っていた物を取られそうになる事例が見られた。また、5歳児は言葉によるやりとりができるため、低年齢児に見られる泣き叫ぶ、手がでる、叩いたりする事例は見られなかった。

方略は、第三者の介入が6件、自然消滅が2件、終結は、実力行使が3件、命令が2件、拒絶が2件であった。

本研究の結果から、いざこざの内容や質は年齢によって変化していくことが示唆された。この変化は、幼児の成長に伴う社会的スキルの獲得や発達上の変化によってもたらされるものであると考えられる。

低年齢児は言葉が未熟であるため、言語方略よりも行動方略に訴える場合が多い。しかし、5歳児になると逆に言語方略が増え、言葉によるいざこざが増えてくることが明らかとなった。

これらのことから、保育者は乳幼児期の発達過程を捉え、いざこざ場面を幼児の自我発達を促すための貴重体験と捉えながらの援助が求められる。

注

1) 山本（1995）は、相互の利益・要求や意図・主張が対立し、葛藤状態に陥った時に「いざこざ」が発生した状態としている。本研究では、「いざこざ」は双方の意志や主張の食い違いによって起こる葛藤状態のことを指す。

キーワード：いざこざ、5歳児、参与観察、発達過程

○口頭発表ルーム 2 10:00~12:00

時間	第2分科会 テーマ・発表者（筆頭者）
10:00	共感性における視点取得の育成ー外国語の授業における教材開発を通してー ○野田清美／創価大学教職大学院
10:30	高校生の社会貢献プロジェクトを支援する大学生サポーターの育成ーSAGE JAPAN運営大学生による学習会に着目してー ○高久孝一／創価大学教育学部教育学科宮崎猛研究室
11:00	特別活動「話し合い活動」の他教科学習への活用における成果と課題ー特別活動研究校の教員意識調査をもとにー ○小畑伸一／八王子市立式分方小学校
11:30	学習成果に及ぼす先行オーガナイザーの効果に関する研究 ○新谷しづ恵／創価大学通信教育部

共感性における視点取得の育成 —外国語の授業における教材開発を通して—

野田 清美

(創価大学教職大学院教職研究科)

1. 問題と目的

多様化やSDGs達成に向けて進んでいる現代において、共感性を育成する必要性がより一層高まってきており、SDGsへの教育的取り組みは様々な視点から実践されている。しかし、我々の生活との繋がりが見いだしにくい課題がある。また、小学校学習指導要領解説外国語活動編(2008)で、1. 自分の感情や思いの表現、2. 他者の感情や思いの受容、3. 不十分な語彙や表現力及び理解力が課題としてあげられた。そのため、自己と他者の立場に立ったコミュニケーションを図ろうとする態度をはじめ、相手に共感する力の育成が、それらの課題達成の第一歩であると考え。そこで本研究では、外国語の授業における帯活動を通して、共感性に必要な様々な立場の視点取得を目指し、他者の立場に立ち物事を考えるコミュニケーションをとるための基礎を築けることが可能かを明らかにする。

2. 方法

都内小学校第6学年28名を対象に外国語の授業の帯活動を通し、以下の3つのデータを収集した。

(1) 児童用多次元共感性尺度のアンケート(事前事後)

5件法全9問の項目を用いたアンケートから、外国語授業における児童の多角的な立場の視点取得の現状把握と事後との比較を行う。

(2) 外国語授業アンケート(事前事後)

どの程度他者の気持ちを想像しているのかの現状把握と、事後との比較をする。事後外国語授業アンケートの自由記述からは、教材改善の視点で分析をする。

(3) 児童の活動の実践記録

1セット2回(全6回)とし、2回中1回はマンガのセリフを考え、もう1回はペアで共有する活動を行う。そして、他者の状況や気持ち、感情を読み取ろうとしているか分析をする。また、録画・録音機器を基に、児童の様子と共感性に関連を見だし、(1)(2)との結びつきを見る。

3. 結果

(1) 児童用多次元共感性尺度のアンケート

対応のあるt検定から、全体、男子間、女子間、ペア

間において有意差は見られなかった。事前事後ともに個人合計点数が高く、児童の主観的判断は人の立場に立ち相手の考えや気持ちを高く捉えていると考えられる。

(2) 外国語授業アンケート

事前事後両方で、関係性が薄い(近所の人・店員)、または無い人(知らない人)の回答率は低く、身近な人(家族・友達)は高かった。質問回答の理由では、相手の感情の変化に配慮する記述が多かったため、相手と自己の関係性や相手の感情の変化が、多角的な視点を持つことと関連がある可能性がある。また、マンガのセリフを考える活動に前向きな自由記述が多かった。

(3) 児童の活動の実践記録

1セット毎で使用したワークシートのセリフを6つのカテゴリー(受容、提案、可能性、指示、関与、自己投影)に分けた。sheet1・2は全体的に聞き手の視点に立って言葉をかけていた。sheet3は指示に関するセリフが多かった。ペアで共有する時間や感想が充実していた児童は、ペアのセリフを受容する内容の記述が多く、疑問を持つ児童も一部に見られた。

4. 考察

セリフを共有する時や感想の記述が共感性と関係が深いことが明らかになった。登場人物に共感するセリフであっても、現実世界で相手に伝えるときに活用されていなければ宝の持ち腐れであると考え。今後は共感性と行動の関連にも注目して教材開発を行っていく。

5. 引用文献

- 文部科学省(2008). 小学校学習指導要領解説外国語活動編 p9
文部科学省(2017). 小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説外国語活動・外国語編 p67
Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113–126.
長谷川真里・堀内由樹子・鈴木佳苗・佐渡真紀子・坂元章(2009). 児童用多次元共感性尺度の信頼性・妥当性の検討 *パーソナリティ研究* 第17巻 第3号 307~310.

キーワード: 共感性, 視点取得, 小学校外国語, マンガのセリフ

口頭発表5

高校生の社会貢献プロジェクトを支援する大学生サポーターの育成 —SAGE JAPAN 運営大学生による学習会に着目して—

○高久孝一・浅川太一

(創価大学宮崎猛研究室・教育学部)

1. はじめに

創価大学宮崎猛研究室では、創価大学教育学会奨励事業の支援を得て、SAGE JAPAN という教育プログラムを運営している。このプログラムでは高校生が大学生や企業と連携し、社会貢献プロジェクトを考案・実践する。SAGE とは Students for the Advancement of Global Entrepreneurship の略であり、米国で2002年に創設された。起業家精神を育成することで、若者を社会貢献の主体者に成長させることを目的としている。ここでいう起業家精神とは、起業のノウハウではなく、問題解決力、社会貢献力、提案力、創造力等を指し、これらの育成を通して、社会を変革する力を持った若者を育成することを目指している。また、SAGE は、中等教育と高等教育、公的教育と実業界、そして国と国との架け橋として位置づけられる。SAGE JAPAN は2012年、宮崎猛研究室の学生が中心となって、教育的な要素を強調する形で日本に立ち上げられたものである。

2. 問題の所在

SAGE JAPAN は活動が始まって8年目になる。運営側も、高校生のサポートをする大学生サポーターも、一連の活動内容が定まってきた。昨年度からは、大学生サポーターが高校生を円滑に支援できるよう、「大学生サポーター学習会」を年に6回ほど開催している。今年度もオンラインで、全6回の学習会が行われた。大学生サポーターや支援を受ける高校生にとって、この学習会が効果的なものになっているのかを明らかにしていく時期であると考えた。今後、10年、20年の存続を意識するSAGE JAPAN の活動において、大学生サポーターが高校生へ質の高い支援を行うために、大学生サポーターに焦点をおいて、本研究を開始した。

3. 研究の目的と方法

本活動は社会貢献プロジェクトの考案・実践を通して高校生と、高校生をサポートする大学生サポーターのアントレプレナーシップの向上を目的に行われているものである。SAGE JAPAN では、大学生サポーターが高校生をサポートする際に必要な情報を

提供する、「大学生サポーター学習会」というものを開催している。本研究では、高校生をサポートする大学生サポーターを対象にアンケート調査を行い、「大学生サポーター学習会」が高校生をサポートする上で有用性のあるものとなっているのか、同学習会の意義や課題を検討する。

4. 研究の内容

4.1 大学生サポーター学習会

SAGE JAPAN の特徴の1つとして、高校生自身が解決したい社会問題を見つけ、プロジェクトを考案・実践まで行うことができる点がある。高校生はプロジェクトの考案・実践を行う上で、必要な内容を大学生サポーターの支援を受けながら学び、活動していく。つまり、大学生サポーターの支援の質が高校生の成長を大きく左右するのである。そのため、大学生サポーターが高校生を支援する上で必要な知識や情報を伝える場として、「大学生サポーター学習会」を開催している。学習会の内容はワークブックを参考に、運営メンバーの話し合いによって決定されている。そして各回の中でプレゼンテーションやロールプレイングを行いながら、高校生を支援するためのノウハウを提供している。

4.2 アンケートの実施とその分析

本研究では、大学生サポーターを対象に、学習会で高校生をサポートする上で必要なことをどの程度学べたのか、またその能力が学習会のどの内容を通して身についたと感じているのかをアンケート調査し、その結果を分析して発表するものである。

5. 今後の展望

アンケートの分析結果をもとに、「大学生サポーター学習会」の有用性や課題を明らかにし、次年度以降の学習会の内容を再構築する。そして、大学生サポーターが高校生に対してより質の高い支援を行うことができる学習会を提供していく。

キーワード：社会貢献、大学生、学習会

特別活動「話し合い活動」の他教科学習への活用における成果と課題

特別活動研究校の教員意識調査をもとに

小畑伸一

(八王子市立式分方小学校)

1. はじめに

小学校における特別活動の指導は、人間関係形成・自己実現・社会参画の3つの視点が学習指導要領に示されている。この視点をもとに教員は、各学級では集団改善手続きを行い、よりよい集団や学校生活を目指して指導を行っている。その一つとして、児童は学級活動(1)などで話し合い活動により意見の合意形成ができる能力を身に付けている。こうした能力は、他教科の授業に活かさせることが期待されている。実際、特別活動の研究者・実践者からは、この指導の成果が他教科へ活用されていることを願っている。無論、他教科においても話し合い活動は活発に行われているが、活用されているかは把握されてはいない。また、活用する際の課題があげられることも予想される。この研究では、長年特別活動の研究を行ってきた八王子市立式分方小学校教員へ意識調査を行い、その成果と課題をもとに話し合い活動の実態をもとに、検討するものである。

2. 調査

対象：小学校5人の教員に質問を行った。20代男性教諭2名、20代女性教諭1名、50代女性教諭1名、40代男性教諭1名

学校の実態：特別活動の研究を6年継続し、研究発表や授業公開には国内外から多くの参加者があった。エジプトからは教育庁の官僚が訪れ、自国で実践するモデルとなっている。どの学級も、学級活動の話し合いができる学校である。

時期：2019年11月～12月

質問項目：特別活動の指導の成果として、教科の学習指導に話し合い活動が活かされているか、以下の2項目について質問をした。

- ① 話し合い活動の意欲：学級活動の建設的な話し合いの態度など
- ② 話し合い活動の技術：学級活動の合意形成を行う話し合いの思考や技術など

3. 調査結果と考察

1) 結果

調査対象の全ての教員が①態度の項目については肯定的な回答を示した。児童が「どの教科でも話し合う意欲がある」「建設的な意見が出される」など、その効果が期待される内容であった。これは、本校の学校公開のアンケートや他教科の研究協議会でも多く見られる。一方、②「思考や

技術」の項目については、他教科で合意形成を用いる学習活動がほとんどなく、学級活動の特別活動の技術は転用しづらいとの回答であった。全ての教員で、活用されていないという意識であった。その原因として、算数や理科では考察を行う話し合いが必要になり合意形成を求めないことや、国語の討論においては批判的な意見も必要になることがあげられた。そのため、教員が他教科学習における話し合い活動の指導について、合意形成を求める話し合い活動の技術を用いる意識が低いことが分かった。

2) 考察

各教科においては、教科の特性に従って課題提示をするため、学級活動の話し合いの思考や技術とは指導が異なることがある。そのことを教員が意識するため、話す意欲は役立っても、思考や技術が活用されないと考えているようだ。それにより、特別活動の話し合い活動を活かす意識がないことも示された。しかし、教科ごとで話し合いの視点は異なっても、一つの教科にしか通用しない話し合いがあるのかは疑問を感じる。特別活動の話し合いは相手の意見を尊重する活動であり、「対話」に近いものとして捉えられる。この「対話」を通じた学習は、他者と意見を交流する際に考え方を広げることが期待できるものである。そう捉えることで、対話の視点にたった学習活動は、どの教科の学習においても活用できるものと考えられないだろうか。そうならなかった原因として、学級活動の話し合いの技術に目を向けてしまいがちになり、対話的な話し合いとしての意識がうすれてしまったことが考えられる。

特別活動の話し合いの技術の一つの教科のものだけにしないためにも、教員の他教科への活用の意識付けが必要になると考える。また、各教科の話し合い活動を統合し、それを一覧にして掲示するなど、児童がその技術を意図的に選択できるようにしていきたい。多くの学校で教科指導の校内研究が行われているが、話し合い活動は他教科への活用も考えて児童に提示することで、汎用性のある能力になっていくことを今後の研究としていきたい。

学習成果に及ぼす先行オーガナイザーの効果に関する研究

新谷しづ恵

(創価大学通信教育部)

1. はじめに

第 17 回教育研究大会において、「中学生を対象に物理分野『電流と電圧』を教材として、発見学習と先行オーガナイザー（以下先行 O）を活用した有意味受容学習の違いによる学習成果を比較したところ、先行 O を活用した有意味受容学習が有意に学習成果を高める指導法であることが明らかとなった。」と報告した。また、第 18 回教育研究大会において、「中学生を対象に物理分野『運動と力』を教材として、説明オーガナイザー（以下説明 O）を活用した場合と比較オーガナイザー（以下比較 O）を活用した場合の学習成果を比較したところ、説明 O を活用した有意味受容学習が有意に学習成果を高める指導法である事が明らかとなった。」と報告した。これらの研究は、今、学校教育に求められている「確かな学力」を育成するために、学習成果が高くなる指導法を明らかにすることを目的に実施したものである。

先行 O を活用した有意味受容学習は、Ausubel が提唱した指導法であり、Ausubel (1978) は、先行 O はその用途により説明 O と比較 O に大別され、説明 O は、学習する内容が生徒にとって非常に新しく、親近度の低い教材の場合に、比較 O は、学習する内容が生徒にとってある程度親しみがあり、既存の知識と関連している場合に適していると述べている。

本研究では、学習成果の高い指導法の研究をさらに進めるため、生物分野「遺伝」を教材として、学習成果が高くなる先行 O を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象：公立中学校 1 年生 64 名。

(2) 調査内容：事前テスト結果から、生徒を、説明 O 提示群 (A 群) と比較 O 提示群 (B 群) に振り分け、先行 O の違い以外はすべて同様となるよう留意して授業を行った。事前テストは、遺伝に関する生徒のレディネスを調査するための基本的な問題で構成した。

1 時間目の授業は、遺伝に関する基本事項を知らせ、課題 (1) 「純系の赤い花の花粉を純系の白い花のめしべに受粉させて種子を作った。その種子から育った花はすべて赤色だった。それはなぜか。」を提示した。先行 O を提示し、班ごとに相談し、討議し、結論を導き出した。2

時間目は、課題 (2) 「課題 (1) でできた種子の花粉を同じ花のめしべに受粉させて種子を作った。できた種子から育った花の色はどのようなになるだろうか。」を提示し、2 時間目と同様にして結論を導き出した。3 時間目に、事後テストと授業に関する意識調査を行った。授業実施 1 ヶ月後に、事後テストと同様の遅延テストを実施した。事後テストは、事前テストと同じ基本問題と授業内容が理解できたか確認するための理解確認問題と応用力を確認するための応用問題で構成した。授業に関する意識調査は、以下の 4 項目を 5 件法で調査した。

- ① 「遺伝」の授業はわかりやすかったですか。
- ② 班の話し合いには積極的に参加しましたか。
- ③ 班での話し合いは楽しいと思えましたか。
- ④ 先生の説明はわかりやすかったですか。

学習指導要領の文言を、説明 O として提示した。優性の形質を黒のポスターカラーや黒いボールで、劣性の形質を赤のポスターカラーや赤いボールとして考えることを、比較 O として提示した。

3. 結果・考察

テスト結果は、先行 O 要因 (説明 O 提示群・比較 O 提示群) × 学力要因 (高群・低群) × テスト時期要因の 3 要因混合計画で分散分析を行った。意識調査結果は、先行 O 要因 × 学力要因の 2 要因調査者間計画で分散分析を行った。

表 1 分散分析結果 (有意差有のみ)

理解確認問題	説明 O > 比較 O ; 事後 > 遅延
応用問題	説明 O > 比較 O
意識調査①	説明 O > 比較 O
意識調査④	説明 O > 比較 O

表 1 の結果から、生徒が理解しやすかったのは、説明 O を提示した場合であろうと考えられる。

生物分野「遺伝」の単元において、公立中学校で行われる一斉授業において、生徒が理解しやすいと感じ、さらに学習成果を高めるための学習指導法としては、説明 O を提示した有意味受容学習が有効ではないかと考える。

キーワード：先行オーガナイザー，説明オーガナイザー，比較オーガナイザー

○自主シンポジウム 13:00~14:30

内 容
テーマ：小・中学校等におけるインクルーシブ教育の現状と課題～学ぶ喜びを引き出すための交流及び共同学習の進め方～ 企画者：山内俊久 創価大学教育学部
司会者：山内俊久（創価大学教育学部児童教育学科） 話題提供者1：山内俊久（創価大学教育学部児童教育学科） 話題提供者2：高橋雅一（埼玉県立草加かがやき特別支援学校） 指定討論者：加藤康紀（元創価大学教育学部児童教育学科）

自主シンポジウム

小・中学校等におけるインクルーシブ教育の現状と課題 ～学ぶ喜びを引き出すための交流及び共同学習～

企画者：山内俊久（創価大学教育学部児童教育学科）

司会者：山内俊久（創価大学教育学部児童教育学科）

話題提供者1：山内俊久（創価大学教育学部児童教育学科）

話題提供者2：高橋雅一（埼玉県立草加かがやき特別支援学校）

指定討論者：加藤康紀（元創価大学教育学部児童教育学科）

（企画趣旨）

平成29年3月告示の学習指導要領の施行が、2020年4月の小学校・特別支援学校小学部から、順次スタートとなる。今回の改訂で示された学習指導要領は、わが国が障害者の権利に関する条約締結後に示された最初のものとなり、わが国のインクルーシブ教育の基本形が織り込まれたものとみることができる。しかし、コロナ禍に伴う2019年3月からの学校の一斉休校の中、その勢いは下火とはなりがとであるが、特別な教育的ニーズのある児童生徒への支援に取り組む教員の役割は変わることはなかったとも言える。

わが国のインクルーシブ教育システムは、連続性のある「多様な学びの場」と「交流及び共同学習」という柱によって基本的な枠組みが構築され、障害のあるもの者も、ないもの者も共に学べる仕組みが整えられておる。そして、こうしたシステムにより学ぶ児童生徒の学びを支える教師の専門性の向上策が問われている。

本自主シンポジウムでは、小・中学校等における障害のある児童生徒とない児童生徒の共に学ぶ仕組みを支える「特別支援教育コーディネーター」により実践報告に基づき、その必要な条件整備を示した上で、すべての児童生徒の学ぶ喜びを引き出すための教師の子どもへの関わりの在り方について考えていきたい。

（話題提供）話題提供者1においては、インクルーシブ教育における「交流及び共同学習」の基本的な意義及び制度について概説する。話題提供者2は県立特別支援学校に勤務して9年目、また特別支援教育コーディネーターを担当し2年目を迎えた。この担当は、校内における自身の学部・学年の所属に拘わらず、幼稚園・保育園、小・中学校、高等学校支援のための地域連携業務に携わるとともに、自校の在籍児童生徒の教育支援体制構築の責任者である。勤務校は知的障害特別支援（小・中・高）で、3市を通学区としてしているが、児童生徒数は400名に近く、

県内トップレベルの規模となる。地域支援では通学区域内の幼・保、小・中、高校との連携が中心で、業務を通して感じる事がいくつかある。一つは通常の学級においても特別支援教育への必要性の認識と期待が高まる一方、子ども一人一人の特別な教育的ニーズのある子どもとして認識するには至っていない状況である。しかし、特別支援学校の児童生徒が参加する交流及び共同学習に継続して取り組むことで、自校の児童生徒が小中学校等の児童生徒に挨拶をされたり、言葉をかけられたりして繋がりをもつことができている。また、普段と違う環境での経験を通し、自校の児童生徒にとっては社会で生きる自信と力になり、通常学校の児童生徒にとっては、障害理解のための良い経験となっている。なお、家庭・学校・福祉等の関係機関連携についても話題提供する。

（指定討論）インクルーシブ教育システムとは形態だけ言えば、「障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み」だが、それが善いか悪いかでなく、目的が達成できるかどうかである。「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とする」ことである。今回は、「交流及び共同学習」での学びのすべての児童生徒にとっての意味を考える。すなわち障害のある、なしにかかわかわず、この学びには一人一人の子どもにどのような意義があるのか。いわば、交流及び共同学習によって子どもたちにもたらされていく「学ぶ喜び」とは何なのかを考えていきたい。通常の学級に在籍する子どもを対象とする場合も、特別支援学校・特別支援学級に在籍する子どもを対象とする場合も、多くの課題が山積する。現場の先生方にも喫緊の課題があるだろう。しかし、夢も語っていただけるとありがたい。夢を持ち続ければ、必ず衆知は英知に結実すると信じるからである。

キーワード：インクルーシブ教育、交流及び共同学習、学ぶ喜び

〇ラウンドテーブル 13:00~14:30

内 容
テーマ：ポストコロナ時代の教育の在り方について語り合う 企画者：創価大学教育学会運営委員会
司会者：長島明純（創価大学教職大学院） 話題提供者：佐生秀之（八王子市教育委員会）

ポストコロナ時代の教育の在り方について語り合う

企画・進行 創価大学教育学会運営委員会

話題提供者 佐生秀之（八王子市教育委員会）

企画主旨

新型コロナウイルスの感染は全世界的な広がりを見せ、いまだにその感染が収まる様子はない。日本社会も同様な状況下であり、学校教育においては、コロナ感染予防対策の観点から、教育活動が様々な制約を受けている。

コロナウイルスの感染予防の観点から、人と人との密なる空間が避けられ、何かの媒介物をはさむ間接的な交流が増えており、他の人と直接的に繋がることの大切さやそのような場の意味を改めて考えるようになった人も多いのではないだろうか。

また学校においても、一緒に学ぶことが出来る喜び、お互いがお互いを支え合っているという手応えなどを、改めて実感できた人もいるのではないだろうか。

このような状況を踏まえ、本学会としては、ポストコロナ時代における、教育の重要性や意味について、更に深く問い直す必要があると感じているが、教育現場では、学校再開が遅れるなどしたために、このような教育の問い直しをする余裕はなく、まずはコロナウイルスの感染予防対策を徹底し、その学習の遅れを取り戻すことに必死である。

そして、教室の机椅子の配置を変更したり、時間割を変更し、授業数を増やしたり、授業の内容を変えたり、教科の勉強を補うために、子どもたちが楽しみにしていた、様々な行事を削るなどする状況が生れている。

日本社会においてもストレスfulな状況が続いており、コロナに感染した家族や医療従事者の家族に対するいじめが起きるなどしている。

そこでこのような状況を踏まえ、本学会の第19回教育研究大会で、ポストコロナ時代の教育の課題とその望ましい在り方について、意見交換する場を設けることにした。

具体的な流れとしては、初めに創価大学教職大学院の修了生で、現在、八王子市教育委員会にて指導主事をされている、佐生秀之さんに「コロナ禍における特別活動の指導の在り方—学校教育ならではの学びの重要性—」とのテーマで、特別活動を中心に話題提供していただき、その後、コロナ渦での教育の現状やその望ましい在り方などについて、Zoomのブレイクアウト・セッション機

能を用いて、グループで意見交換を行う。そして最後に、各グループから出た意見を、全体で共有する。

なお今回話題提供して下さる佐生秀之さんの内容に関して、2020年に日本特別活動学会では、会員を対象に「新型コロナウイルス予防対策への対応を踏まえた特別活動の課題と今後」について意見を聴取した調査がある。調査はグーグルフォームを利用した自由記述を中心とする質問紙調査で、65名の会員から回答を得ている（回収率11%、内訳：小学校教員5名、中学校教員7名、高等学校教員5名、大学教員38名、その他10名）。

この調査の中に、コロナウイルス感染予防対策によって、あるいは他の教育内容の遅れを取り戻すために、特別活動の実践が制限されている状況だからこそ、見えてきた「特別活動の特徴」について質問している項目があり、その解答について以下のように整理されている。

第一に、特別活動は集団・対面を前提とする活動であり、本来「三密的」であるということを再認識したというもの。そうだからこそ「実施するのは難しい」「遠隔で行うのは難しい」という悲観的な立場と、この状況を奇貨として「特別活動の多様なアプローチを生み出すとき」と挑戦的な立場とがみられた。多様なアプローチとして「三密を避けた工夫」「ICTを利用する工夫」「安全な内容とやり方を子ども達と創造する工夫」が具体的に描かれていた。

第二に、学校の存在意義は学習と関係づくりであり、特別活動は学習に間接的に関わり、関係づくりに直接的に関わることを再認識したというもの。関係作りが思うようにできない環境において逆にその必要性が痛感され、特別活動の必要性が再認識された。そして学習の遅ればかりに気を取られて関係作りをおざなりにすると、かえって学習意欲と学力低下を招くという危機感が記されていた。第三に、ともすればルーティンになりがちな特別活動の意味・機能について子ども達とともに考える機会になったというもの。大人と子供が知恵を出し合い、行動する機会が与えられたのだとする意見が記されていた。

キーワード：ポストコロナ・学校教育・現場

第 19 回教育研究大会 運営組織

2020（令和 2）年度創価大学教育学会運営委員会

会 長 関田 一彦

運営委員 長島 明純（教職大学院委員）
宮崎 猛（教職大学院委員）
平井 康章（学部委員）
杉本 久吉（学部委員）
戸田 大樹（学部委員）
野田 清美（教職大学院生）
中谷 弘美（教職大学院生）
夏木 和人（学部学生）
中島 未夢（学部学生）

創価大学教育学会第 19 回教育研究大会研究発表要旨集録

2021（令和 3）年 1 月 31 日発行

編集・発行 創価大学教育学会事務局

〒192-8577 東京都八王子市丹木町 1-236 創価大学教育学部・教職大学院

創価大学教育学会事務局

E-mail wwwsuesjp@gmail.com



創価大学教育学会へのおさそい



創価大学教育学会は、建学の理念に基づき、教育学およびこれに関連する学術の研究を推進し、会員相互の交流を行うとともに、本学の学生や卒業生（修了生を含む）の教育研究の充実に寄与することを目的として以下の事業を行っています。



会員の研究促進を目的とする「総会」「講演会」「研究会」等の主催・後援
機関誌「創大教育研究」の発行（Web版）

在学生会員の教育研究の補助

会員間のネットワークづくりと情報提供 など

会員として「総会」「講演会」「研究会」等の機会に母校に戻ったり、機関誌を読んだりして、最近の研究動向等に触れながら、ご自身の学びの歩みを振り返る機会とすることができます。時には、情報の受け手ではなく、「研究会」や機関誌を通じて、研究成果や実践を発信する側にもなることができます。

卒業生の皆さんで、教職や研究職を目指される方はもちろん、他の職にあっても教育についての学びを深め継続したいという気持ちがある方は、ぜひ入会されることをお勧めします。

入会手続き

<http://www.sues.jp/ktetsuzuki.html> にアクセスして、必要事項を入力し送信して下さい。折り返し、事務局より入会手続きの手順についてお知らせいたします。運営委員会です承の後、会費の振込み方法等をご案内致します。

会費・納入方法（振込みは入会手続き終了後に）

会 費 在学生、卒業・修了生 -- 年額 1,000 円（複数年分まとめて納入することも可能です）

振込先・口座 ゆうちょ銀行

郵便局から（口座番号等） 00100-2-741065

銀行から（支店名）〇一九店（店コード）019

（預金種目）当座（口座番号）741065

（加入者名・受取人名）創価大学教育学会（ソウカダイガクキョウイクガクカイ）

※送金者氏名に続けて、もしくは振込用紙の通信欄に「〇〇年度会費」と記入して下さい。

*恐れ入りますが、手数料につきましては、ご負担をお願いします。

